わ が 街 わ が 故 郷

泉本精工株式会社と松原市

1．泉本精工株式会社と松原

「えーん、サーアテハー、この場のみなさまへー」と始まるご存知、河内音頭。大衆民謡の極致ともいえるこの唄は、お盆近くになると、今でも、ときどきどこからともなく聞こえてきます。河内弁といえば、残念ながらあまり品がよろしくないように思われますが、この河内音頭は全国的にも有名であり、やはり、故郷を感じる一番手ではないでしょうか。そんな河内のど真ん中（旧地理的区分では中河内）に泉本精工株式会社はあります。

また、隣の堺市に日本の中小のベアリングメーカーが数多く集まっているのも、昔、自転車メーカーが集まっていたことと関係があるようで、我社もその辺りに創設の由来があります。我社は松原市に位置していますが、業界では堺地区のベアリングメーカーと同様にとらえられています。

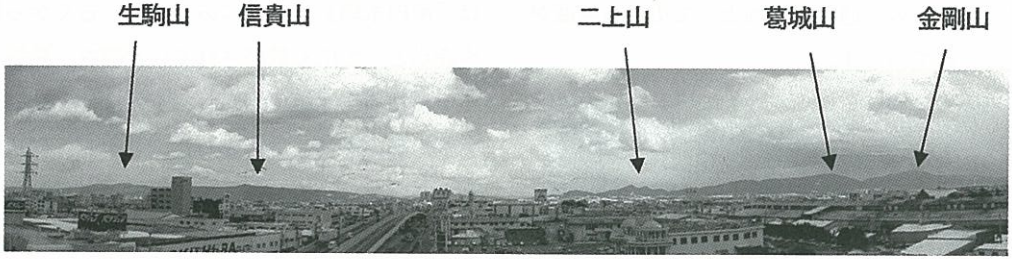
しかし、堺については、いずれ堺市内にその拠をおかれる会社にお願いするとして、今回は松原に関してご紹介します。

本社全景

本社ビル

2．松原の由来

松原は大阪平野のほぼ中央に位置し、北は奈良県下に源を発し大阪湾へ流れる大和川を隔てて大阪市、西は堺市、南は南河内郡美原町、東は藤井寺市、羽曳野市に隣接しています。遠く東には、生駒山、信貴山、二上山、葛城山、金剛山と連なる金剛生駒山地を展望することができます。



本社から見た金剛生駒山地

松原市域は温和な気候と住みやすい地理的環境により、弥生時代から人々が住んでいました。その頃の遺跡とされる上田町遺跡や河合遺跡から、農耕生活を営んでいた様子が見うけられます。古墳時代中頃（五世紀前半)、第18代反正天皇がこの地に『丹比柴籬宮（たじひしばがきのみや)』をおかれて政を執られたことは日本書紀に記されていますが、大和王権の宮が河内におかれた初めての出来事で、在位６年間は五穀がよく実り、人々は賑わい天下泰平であったとされています。後世の人々は丹比柴籬宮を「松生いし丹比の松原」というようになり、＜松原＞の地名はここから名づけられたと伝えられています。

柴籬神社

また、松原の地名が歴史上初めて登場するのは、平安時代の「御室御所高野山御参籠日記」で、その中に[松原荘]として登場します。

現在の松原市は、昭和30年２月１日、当時の中河内郡松原町、天美町、布忍村、恵我村、三宅村の二町三村が、町村合併促進法により合併し、府内21番目の市として誕生しました。当時の人口は36,772人。その後、美原町の丹南、堺市の河合を合併して現在に至っています。

３．松原は昔も今も交通の要衝地

すでに、飛鳥時代には竹内街道と長尾街道が整備され、現在の市域を通り、進んだ大陸文化が難波津から飛鳥へともたらされていました。

奈良平安時代には、長尾街道の現西除川付近で駅屋という古代交通の施設が作られ、また、高野詣でが盛んになった平安時代後半には、下高野街道も主要な道路となりました。今でも、大和川には「下高野大橋」と名づけられた橋があります。もっとも、大和川は宝永年間（1700年頃)に河村瑞賢が手がけた水路変更が完成されるまで、奈良盆地から大阪平野に入った辺りから北へ流れていたので、橋が名づけられたのはずっと後になってからのことです。もちろん、江戸時代にも、それらの道は伊勢参りや、道明寺、葛井寺へ通じる街道として賑わっていました。

現在は、大阪中央環状線、西名阪自動車道、阪神高速松原線、近畿自動車道、阪和自動車道を連結する府内でも最大級の松原ジャンクションを中心に道路が整備され、大阪市内や奈良、三重、愛知、和歌山への分岐点となっています。今後も、阪神高速の堺大和川線の計画があるな

ど、南大阪の交通の要衝地として更なる発展が期待されています。

松原ジャンクション

4．松原市の商工業

松原市は大阪市内中心部から電車で10分～15分という交通の便に恵まれ、人口も13万3000人あまりまで増加、生活の利便性が高く、ベッドタウンとして発展してきました。しかし、面積は16.6平方キロメートルとせまく、大企業は多くありません。

商業は、近鉄南大阪線の河内天美駅、布忍駅、高見の里駅、河内松原駅が中心で、自然発生的にその商業集積が進んできました。しかし、近年は大型ショッピングセンターの進出や、大阪市に近いがゆえに生ずる人々の大阪市への流出等できわめて厳しい環境にあります。

松原市の地場産業といえば、金網、印材、真珠核等があり、いずれもその高い全国シェアを誇っています。特に、金網は古く、そのルーツは「河内木綿」の生産にあります。古くから換金商品として広く栽培されていた綿を、熟練した毛織技術で木綿に織られ、それは「三宅木綿」として名声を博していました。しかし、明治維新後、安価な輸入綿が入ってくるようになり、その技術も欧風の紡績技術に取って代わられるようになりました。ところが、その毛織技術や機械を織金網に活かしたことに先人の英知がみられます。現在は、家庭用金網、建築用金網に関して織金網に代わる素材がでてきており、残念ながらその工場数は減少してきました。しかし、フィルター、スクリーン金網、基盤用極細金網に特化したユニークな技術はいまだ健在です。

そうそう、地場産業として、当社のベアリングも挙げておきましょう。堺地区の影響を受けて、自転車部品等の産業や、繊維産業も盛んです。

また、高速道路の整備ができたことに関連して、宅配便等の各トラック会社の流通ターミナルが随所に見られます。

昔の人々が培ってきた木綿の毛織技術やその設備を、まったく異なった業種の金網に活かすということは、異業種交流で新しいものをと叫ばれているこの不況の時代に、大いにヒントになるのではないでしょうか。

筆者：泉本精工株式会社
取締役社長　泉本信彦
E-mail:izumoto@iks-jp.com
URL　http://www.iks-jp.com